

There 構文の記述に関する一考察

大川 裕也

1. はじめに

小論の目的は、学習英文法¹で扱われる *there* 構文の記述の真偽を議論し、英語学的な分析を適用しながら、当該構文の適切な記述を提案することである。小論で扱う英語の *there* 構文は(1)に示すような文である。

- (1) a. *There are some people in the waiting room.* (Quirk et al. (1985: 1405))
- b. *There's a friend of yours at the door.* (Huddleston and Pullum (2002: 1394))
- c. *There seem to be no poisonous snakes around here.*
(Leech and Svartvik (2002: 298))

中学校や高等学校で使用される教科書では、*be* が生起する *there* 構文が多く見られる。高等学校の教科書では、(1c)のようないわゆる「主語繰り上げ」の文も扱われる。

学習英文法における *there* 構文は、おおよそ以下のように記述されている。

- (2) a. *There is/are* のように、*there* と *is/are* はセットである。
- b. *is/are* の後に現れる名詞句は「(意味上の) 主語」である。
- c. 「(意味上の) 主語」の後には「場所を表す副詞句や前置詞句」が必要である。

しかし、実際の言語資料と照合してみると、(2)の記述は正確なものとは判断することはできない。

¹ 小論における「学習英文法」とは「教育と関連した英文法」(大津 (2012: 3)) のことである。現在においては、小学校以上に相当する学校で教示される英文法と考えてよい。「(英語) 学習者」は、諸学校で英語を学ぶ児童、生徒及び学生を指す。

There構文の記述に関する一考察（大川）

- (3) a. There took place an elaborate ceremony in honour of the visiting dignitaries.
(Quirk et al. (1985: 1409))
- b. There are good teachers and bad teachers.
(Huddleston and Pullum (2002: 1393))
- c. There was no one (for her) to talk to. (Leech and Startvic (2002: 299))

(3a)が示すように、there 構文には *be* 以外の動詞も現れるため、(2a)は妥当な記述ではない。このことは多くの先行研究で既に議論されている。(3b)及び(3c)は、いわゆる場所句がなくても適格と判断されるため、(2c)は妥当性を欠く。Quirk et al. (1985: 1406)は、文末の要素 (final element)、つまり場所句が文脈から想定可能な場合は省略されると追記している。以下の文が示すように、括弧内の句は文脈から想定可能であるため、それがなくても適格である。

- (4) a. There is a God (in the Universe). [*ie* now as always]
- b. Is there any other businesses (for the committee at this meeting)?
- c. There must be a more direct route (than the one we're discussing).
(Quirk et al. (1985: 1406))

では、(2b)はどうであろうか。There 構文の主語に関しては統一された見解が見当たらないようであるが、動詞の形が「*is/are* の後に現れる名詞句」の数に呼応する事実により、(2b)の妥当性は維持されるように思われる。しかし、次章以降で詳述するが、この記述は英語学的な分析と相容れず、学習者を誤解へ導く可能性がある。

小論では、英文法書における there 構文の記述を概観し、(2b)の記述が学習英文法において一般的な記述であることを示す。そして、(2b)の記述が引き起こしうる問題点に言及する。最後に、学習英文法における there 構文の記述を新たに提案し、それが学習者の誤解をなくすための一助となることを実証する。

2. There 構文の記述

ここで、英文法書での *there* 構文の記述を概観する。まず、Quirk et al. (1985) での記述を見る。Quirk et al. は、豊富な実例と詳細にわたる解説が盛り込まれた大著で、多くの語法・文法研究者によって長年にわたり参照されている。

- (5) a. There is a regular correspondence between existential sentences with *there + be* and clauses of equivalent meaning as specified in terms of the basic clause patterns, ...
 b. subject + (auxiliaries) + *be* + predication ~ *there* + (auxiliaries) + *be* + subject + predication

(Quirk et al. (1985: 1403))

(5a)では、基本語順の文の形式と *there* 構文の形式が対応するもの (correspondence) であると説明し、(5b)がそれを具体的に示している。(5b)の「~」の前後に“subject”があることから、*there* 構文に現れる名詞句は「主語」であることがわかる。

江川(1991: 196-197)では、*there is/are ...*の文について「意味の上では次にくる名詞が主語であるが、文法的には文頭の *there* が主語の扱いを受けている」と説明している。つまり、意味上の主語と文法上の主語は区別されるということである。以下の例は、文法上の主語が「次にくる名詞」ではなく *there* であることを実証している。

- (6) a. There's a book on the desk, isn't there?
 b. You wouldn't want there to be another war.
 c. There being no taxis available, we had to walk home.
 d. What's the chance of there being an election this year?

(江川 (1991: 196-197))

(6a)では *isn't* の主語位置、(6b)では *to be* の主語位置、(6c)では現在分詞 *being* の主語位置、(6d)では動名詞 *being* の主語位置に、それぞれ *there* が現れている。

綿貫他(2000: 46)は、「特殊な文型」の項で *there* 構文を「There + *be* 動詞 + 主語」という形式で導入している。さらに、「この構文は<動詞 + 主語>という形になるので、第1文型として扱われる」と明言している。

3. 英語学的な分析

自動詞について議論する際、自動詞を「非能格動詞」と「非対格動詞」の2タイプに分類することが一般的である。Levin (1993)によると、there 構文中に生起する主な動詞は以下の非対格動詞である。

- (8) Verbs of existence
 coexist, ?correspond, ?depend, dwell, endure, exist, extend, flourish, languish, linger, live, loom, lurk, overspread, persist, predominate, prevail, prosper, remain, reside, shelter, stay, survive, thrive, tower, wait (Levin 1993: 249)
- (9) Verbs of appearance
 appear, arise, awake, awaken, break, burst, come, dawn, derive, develop, emanate, emerge, erupt, evolve, exude, flow, form, grow, gush, issue, materialize, open, plop, result, rise, spill, spread, steal, stem, stream, supervene, surge, wax; pop up, show up, turn up (ibid.: 258)
- (10) Verbs of occurrence
 ensue, eventuate, happen, occur, recur, transpire (ibid.: 260)

以上に列挙した一連の非対格動詞に見られる統語的特徴は、主語がもともと直接目的語として規定されるという点ある。この見解は、種々の自然言語に見られる言語現象を考察して得られたもので、今もなお支持されている。例えば *There occurred a tragic event yesterday.* のような文では、(11)が示すように、*a tragic event* が *occurred* の直接目的語として規定され、空 (empty) の位置に *there* が挿入されたことになる。

- (11) ϕ occurred a tragic event yesterday.
 → There occurred a tragic event yesterday.

さらに、*A tragic event occurred yesterday.* のような基本語順に従った文は、直接目的語が空の位置に移動して生成されたと考えられる。

- (12) ϕ occurred a tragic event yesterday.
→ A tragic event occurred yesterday.

学習英文法で「非対格動詞」という馴染みにくい用語を使用するのは控えるべきだが、少なくとも「存在や出現を表す特定の自動詞」という平易な用語で導入することは問題ないであろう。

以上が英語学的な分析である。当該文に現れる名詞句を主語とみなさない点で、旧来の学習英文法の記述と異なる。さらに、(11)に着眼すれば、**there** 構文は純粋な第1文型ではないことが理解できる。学習英文法において適切な記述の提示を優先するのであれば、英語学的な観点で文法を教示すべきである。次章では、以上の分析を学習英文法に適応可能な記述にまとめ、それにより学習者の誤りが減少することを主張する。

4. 学習者の誤り

英語学習者が完成させた英文に留意すると、以下のような不適格な文を目にすることがある。これらの文は、先の(8)、(9)、及び(10)の自動詞を誤って受動文で適用した結果の産物である。

- (13) a. *This problem is existed for many years.
b. *The most memorable experience of my life was happened 15 years ago.
c. *My mother was died when I was just a baby.

Exist は(8)、*happen* は(10)に属しているので、受動文は許されないはずである。さらに、*die* は存在や出現を表さないため先のリストには挙げられていないが、非対格動詞として考えられることが多い。従って、(13a)や(13b)と同様に受動形にはできないはずである。この誤りの原因として想定できることは、(13)で使用した動詞を誤って他動詞とみなしていることである。一定の水準に達した学習者は、他動詞は能動文と受動文の両方で使用できることを習得しており、以下の(14a)と(14b)は論理的に同等であることを理解している。

- (14) a. A causes B.
- b. B is caused by A.

しかし、先のリストの非対格動詞を *cause* と同じように他動詞として認識してしまうと、(14)を誤って適用し、(13)のような文が完成するのである。このような誤りは、しばしば「非対格性の罣」と呼ばれることがある。

ここで、前章での分析を学習英文法にも適応されるような記述にまとめる。小論では、この記述を提示すれば、(13)のような誤りは減少すると主張する。

(15) 「存在や出現を表す特定の自動詞」の特徴

- a. もともと動詞の後に直接目的語（存在するものや出現するもの）がある。
- b. 動詞の前はもともと空で、そこには何も入っていない。
- c. もともと何も入っていない場所（動詞の前）に *there* が入るか、直接目的語が移動する。
- d. 存在や出現の発生源となるような要素は必要ない。

(15a)は他動詞と一致する特徴である。しかし、(15b)及び(15c)は他動詞と異なる。「移動」という概念は旧来の生成文法で提言された変形規則に起因する概念で、いささか古めかしいが、学習英文法で用いるには問題ないであろう。(14)のような受動変形も生成文法で提唱された経緯があるが、能動と受動の関係性を会得する上で重要な提示法だと思われる。そして、(15d)も他動詞とは異なる。先の(14)を例とすればわかりやすい。他動詞 *cause* は発生源となるような要素 (A) と発生するもの (B) を必要とするが、*arise* や *happen* などは発生源となるような要素 (A) を必要としないということである。これによって *arise* や *happen* を使用する際に、(14)を誤って適用することがなくなる。

次の例は、筆者が英語または英語学に関わる講義等で学生に尋ねる問いである。

- (16) 以下の文の中から不適格な文を指摘し、不適格である理由を説明してください。
- a. The car stopped.

- b. Paul stopped the car.
- c. A storm arose.
- d. John arose a storm.

正解は(16d)である。正答率は比較的高いと思われる。しかし、(16d)が不適格である理由を理解していない学生が目立つ。一応の正解は、「*arise*（過去形は *arose*）は非対格動詞である。従って、主語位置は空で、もともと規定された直接目的語が主語位置に移動した文が適格となるはずである。(16d)が不適格である理由は、*John* が主語位置を占めており、*a storm* が主語位置に移動していないからである」だろう。このように解答する者がいる一方で、「人間（ジョン）が嵐を引き起こすことは、現実ではあり得ないから」という類の説明が散見される。このように解答する者は、*arise* の本質を理解していない。さらに、現実であり得ないことを述べると、その文は不適格となると断言する者がいることに狼狽してしまう。そのような者に、「ジョンが嵐を引き起こすことはあり得なくても、交通事故なら引き起こす可能性はあるだろう。では、**John arose a traffic accident.* はなぜ不適格か」と問うと、問われた者は閉口してしまう。

5. まとめ

小論では、英文法書に見られる *there* 構文の記述の真偽を考察し、英語学的な視座での記述を試みた。学習英文法では *there* 構文中に現れる名詞句を「主語」として捉えるものがほとんどであったが、この記述は現代の英語学的分析と整合せず、*there* 構文をいわゆる基本文型に対応させるための便宜上の提示法にすぎない。この提示によって引き起こされる諸問題（非対格性の罫など）は、「存在や出現を表す特定の自動詞」という動詞のタイプと(15)で提案した特徴を学習英文法で教示することで解決することを主張した。

生成文法の台頭に端を発し、英語学の研究は今もなお着実に進展している。それとは対照的に、英語学そのものにも興味をもつ大学生が減りつつあるように感じられる。この原因の一つは、英語学研究を通して得られた知見が学習

英文法に反映されていないからだと思われる。英文を基本文型に対応させることに傾倒してきた学習英文法が、英語学的な分析を学ぶ上での弊害となることもある。さらに、外国語の習得に即効性や効率性を求める風潮も看過できない。英語指導者が学習者による多様な要求に応じることが期待される昨今、英語教育業界は相変わらず混乱を極めている。時流に乗りつつ、英語の本質を学習者に提示し続ける姿勢を重んじなければならない。

小論は平成 25 年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。

[参考文献]

- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』改訂三版 東京：金子書房。
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 石黒昭博 (2013) 『総合英語フォレスト』第7版 東京：桐原書店。
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik (2002) *A Communicative Grammar of English* Third Edition, Longman, London.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago.
- 大津由紀雄 (2012) 「学習英文法を考えるヒント」 大津由紀雄(編著) 『学習英文法を見直したい』2-9. 東京：研究社。
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leach and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚久 (2000) 『ロイヤル英文法』改訂新版 東京：旺文社。
- 山岡洋 (2014) 『新英文法概説』 東京：開拓社。
- 安井稔 (1996) 『英文法総覧』改訂版 東京：開拓社。